

冷戦期アジアの米軍心理戦

一 東アジアから東南アジアへの展開と拠点としての沖縄

小林聡明

本稿は、朝鮮戦争期から沖縄返還にいたる時期のアジアで、米軍が行った心理戦について分析を試みるものであった。それは、①米軍が、アジアにおいて、どのように心理戦体制を確立し、1970年代初頭までの期間に、その体制をいかに変容させていったのか、②具体的な心理戦活動の様相について、米太平洋陸軍放送・視覚活動部隊と第7心理戦部隊は、どのように印刷メディアを用いた心理戦を展開したのかという二つの課題の解明を通じて行われた。

本稿では、第一に、東アジアにおける米軍心理戦体制が朝鮮戦争を通じて整備され、南北分断体制の継続と日本本土や沖縄の住民による米軍への反発や抵抗の機運が広まるなかで、1950年代後半には沖縄を拠点とする米軍心理戦体制が明確に姿を現すようになっていったこと。第二に、米軍心理戦体制が、1960年代に入ると、東アジアから東南アジアへと戦域を拡大させた一方、1960年代末から1970年代初頭にいたる頃には東アジアでの心理戦へのコミットメントを総じて低下させたことを明らかにした。

U.S. Psychological Warfare During the Cold War Asia

: Focusing on the Expansions from East Asia to Southeast Asia and Okinawa as the Focal Point

Somei KOBAYASHI

This study analyzes the dynamism of U.S. psychological warfare (psywar) based on Okinawa from the 1950s to the early 1970s. The research focuses on the following two aspects: how did the U.S. Army establish and develop psychological warfare in Cold War Asia? Second, how did the U.S. Army, in particular U.S. Army Broadcasting and Visual Activity, Pacific and the 7th Psychological Operations Group, conduct psywar operations by utilizing printed media?

In conclusion, this paper clarifies the characteristics and mechanisms of U.S. psywar, which could become significant keys in providing a different perspective of Asia's Cold War history.